

生研 ニュース

PHOTO 岡宮誠一

1990.3.10
No.2

IIS TODAY

●第3部

原島文雄教授

本所第3部原島文雄教授、50才。専門は制御・ロボット工学。なかでもロボットマニピュレータのアドバンスト制御を中心に、活発に研究を進めている。研究に対するポリシーは、「研究室メンバーの自主性にまかせて、自由な雰囲気で行うこと」だそうである。研究室のあかりは、毎日夜更けまで消えることがない。

本年1月より、IEEE (The Institute of Electrical and Electronics Engineers) のSecretary (総務理事) という大役に就任。日本人としては2人目である。従来アメリカ中心に運営されてきた同学会を、あらゆるレベルで全

世界の会員 (31万人) が運営に参加できるように改革しようと意気込む。日本とアメリカを往復する国際派研究者。「旅行が好きで、このような生活を結構楽しんでいます。」とのこと。特に本年度は、本所で部主任・所長補佐の要職もつとめる多忙な毎日。体力の秘訣は趣味の水泳・エアロビクスであろうか？ もう1つの趣味である読書は、1日1冊読破を目指している。目下ファミコンに夢中で、なんとドラクエIVに挑戦中とのこと。1男1女の父、働き盛りである。

■生研イブニングセミナー……一つの試み



2 研究の専門化がいよいよ進む今日、生研内でも「隣は何をする人ぞ」となつては困ります。ましてや外の方々には、一体あの「生研」というのは何をやっているのか、我々になにか関連していることをやっているのかと、雲をつかむような状態でしょう。

このようなことを考えて、「都市」を中心テーマに、金曜日の夜6時からという前例のない時間帯に公開講座を開いて早くも三年になります。予想外に好評で、第一・第二会議室がいっぱいになることもしばしばです。これまでのテーマは、「都市と空間を考える」、「都市を支える」、「都市と環境—21世

紀に向けて—」で、1990年秋のテーマは「都市のしくみ—居住と環境の基盤」です。乞う御期待。

東京大学公開講座のように、多くの普通の市民の方を主体にするのは大変難しい。このイブニングセミナーはそのような方々も含んでいます。現業の方・企業の研究所の方などの専門家の方にもたくさん来ていただいています。一方で教養学部「全学一般教育ゼミナール」の一環にもしていますから、毎年50人程度の学生が駒場から来ています。出してもらったレポートを読むと、我々が硬すぎると思う話でも、構成がしっかりしていれば文化系の学生にも大

変楽しく、興味を持たれていることがよくわかりました。

このセミナーは生研の教官にとっては一つの試練（しかし、楽しい試練）です。誰にでもわかりやすく自分の専門をしゃべる、これは大変難しい。自分と同類の専門家も満足し素人も納得する話をする、これが講演の理想像ですが、日頃研究をキチンとしていて本質的なことをつかんでいないと、なかなか出来ることではありません。各教官の準備もなかなかに入念で、生研内の方々も聞かないと損ですよ。

〔龍岡 文夫記〕

所長と生研職組・同婦人部との懇談

1月26日（金）、2月15日（木）両日共15時より17時まで、第4会議室において、所長より職組に技術職員問題に関する検討会の経過についての説明があり、意見の交換が行われた。

また1月29日（月）には15時より16時30分まで、第4会議室において所長と職組婦人部の懇談が行

われた。出席者は岡田所長、松本事務部長、白石・木下職員担当所長補佐、婦人部から小駒部長、三村・古谷副部長ほか数名であった。掛長昇格と教務職員問題が話し合わせ、所長は生研が女性職員にも一層働きがいのある職場となるように努力したいと述べた。

（職員担当 木下 健記）

委員会等の活動報告

■施設掛と営繕委員会

施設掛の業務は多種、多彩である。施設掛に対しては、「漏水修理」、「コンセントの取設」、「壁面塗装」に代表される改修、補修、移設に伴う工事掛というイメージを持たれている人が多い。確かに、これらの工事は、年間300件を越えており、施設掛と研究室の交流をはかる契機となっている。しかし、これらの工事の大部分は、建物と設備の老朽化によるものであり、施設掛の顔となつては困るものである。

地震によって、電気が数週間にわたって停止することを想像してみる。電子計算機、パソコン、実験装置、計測機器、コピー機器……が利用不可能となる。このような想像をしてみると、生研で産み出される論文の大部分は「電気」に依存していることがわかる。また、研究推進には、人的交流と同時に、情報交換は不可欠である。その主役は電話、ファックスなどの通信施設であり、これらの施設も「電気」に依存している。

「営繕」とは「器」を造るという意味である。研究活動の活発化は専門分野の多様化と細分化をうながし、研究の方法も千差万別となっている。このような現状において、あるいは、将来の研究活動



左：半谷営繕委員長
下：施設掛 後列左より 酒井、榎本、小松崎、橋浦、池田
前列左より 吉田、斎藤、吉沢掛長、富井



を支えるには、「器」の提供のみでは充分ではない。光・熱・水に代表されるエネルギー源や通信、伝達施設等の個々の研究に応じた適正な整備が望まれる。言い換えると、「施設掛」から「研究環境整備掛」への発展をはかっていく必要がある。

研究部と施設掛を結ぶパイプは営繕委員会である。営繕委員会を中心として、将来の研究環境整備について考えていきたいものである。現在の研究を維持するためには、地震や火災などに対する防災

も重要である。お手もとに配布してあります「防災手帳—あなたは どうする?—」の編集や消防訓練の計画等も営繕委員会の仕事となっている。

施設掛の業務は、土地・建物、電力設備、機械設備、研究実験設備、通信設備の保全、交換業務、構内保安警備、防災対策、危険防止対策、安全管理対策、等、多岐にわたっている。これらの業務を営繕委員会の策定と助言のもとに9名の職員で行っている。

[営繕委員長 半谷裕彦記]



2月1日、東京は数年ぶりの大雪に見舞われました。写真は、本所中庭にてテニスに興じていた(?)雪ダルマを撮影したものです。

VISITS

●生研訪問者

1月11日(木)

大連理工大学

学長 金 同稷 ほか1名 ●中国

2月19日(月)

韓国科学財団代表团

団長 Hong-Yul Kanほか1名 ●韓国



●外国人研究者講演会

2月16日(金)

Prof. Brian J. Stone



Department of Mechanical Engineering
University of Western Australia,
Australia

"The benefits of a system approach to
solving vibration problems"

●客員研究員 1990.3.1 現在

氏名	国籍	現職	部
石 達 民	中国	中国東北工学院 助教授	5
赫 栄 威	中国	北京軽工業学院 助教授	3
A. W. Jayawardena	スリランカ	香港大学 講師	5
尹 在 福	韓国	崇実大学校 教授	2
裴 元 燮	韓国	大有工業専門大学 教授	2
Louissette Priester	フランス	パリ大学 教授	4
Ahsan Kareem	パキスタン	ヒューストン大学 教授	5

●博士研究員 1990.3.1 現在

氏名	国籍	現職	部
李 華 妹	中国	上海工業大学 講師	3
王 樹 杰	中国	中国科学院 助理研究員	5
Siegfried Schmauder	西ドイツ	マックスプランク金属研究所 研究員	4
Klaus Ahlborn	西ドイツ	カールスルーエ原子核研究 センター 研究助手	4
Baijayantimala Mohanty	インド	インド工科大学 研究助手	4
明 賢 國	韓国		2
Kutics Karoly Gusztav	ハンガリー	ブスプレム化学技術大学 助手	4

INFORMATION

■外国人研究者・留学生 との懇談会

日時 3月16日(金) 6:00~8:00

場所 健保会館

■停年退官教官記念講演会

日時 3月20日(火)

講演 2:00~3:00 教授 大蔵明光
「材料の複合化と機能」
3:30~4:30 教授 小林一輔
「コンクリートに対する二酸化炭素の作用」
6:00~ 記念パーティー

場所 第一会議室

PERSONNEL

■人事異動 1990.3.1現在

発令月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(現官職)(所属)
平成2.1.1	小川雄一郎	採用	文部事務官(経理課司計掛)	
2.2.1	後藤和彦	採用	文部事務官(総務課庶務掛)	
2.2.1	木本伊彦	昇任	文部教官助手(第三部)	文部技官(第三部)
2.2.16	加藤茂夫	昇任	文部教官講師(宇都宮大学工学部)	文部教官助手(第三部)
2.3.1	中野美由紀	配置換	文部教官助手(第三部)	文部技官(第三部)
2.3.1	鈴木琢弥	採用	文部技官(第一部)	

■昇任のご挨拶

第4部 助教授 山本英夫



昨年の12月1日付で第4部の助教授に昇任致しました。工学部から生研に配置換になって早3年が経ちます。素晴らしい研究環境のもと、諸先輩のご支援に支えられながら毎日を楽しく過ごしております。

現代はネーミングの時代とかで、こちらに着任したのを契機に、専門分野を微粒子制御工学といたしました。中身は別に変わったわけで

はなく、十数年携わってきた粉体工学なのですが、不思議なことに研究内容が垢抜けしてきたように感じられる昨今です。講師から助教授になったからといって急に中身が変わるわけはありませんが、名は体を現わすとか申します。助教授の名に恥じない体を現わせるよう、今後も研究に専念していく所存ですので、ご指導、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

■寄付研究部門着任のご挨拶

Harvey Abramson教授

このたびイギリスのブリストル大学から生研に来ましたアブラムソンです。カナダのマクギル大学、ブリティッシュ・コロンビア大学で、また昨年からはブリストル大学で教鞭をとっておりました。

現在、論理プログラミングとその自然言語処理への応用に興味をもっています。特に自動翻訳システムには興味があり、EECのEurotraプロジェクトの一貫として開発された多言語自動翻訳システムで日本語が扱えるようにしたいと思っています。

ここ数年、日本の文化、食物、日本語に大変興味を引かれています。生研は東京の中心に位置していて、とてもエキサイティングな研究場所だと思います。まわりの人々も大変親切で、東京での生活にもすぐ慣れることができました。これからもよろしくお願い致します。

Kaigham J.Gabriel助教授

AT&Tベル研究所からこのたび生研に来ましたガブリエルです。ベル研では自動認識工学部門にいました。1983年にMITの電気工学科でPh.Dをとったあと、1983年から1985年までMITで講師を勤め、1985年からベル研に勤務してきました。この4年間は、微小運動システム—ICコンパチブルな材料とプロセスを用いて作製されるメカトロニクスデバイス—の研究に従事してきました。東大生研滞在中はこの分野の研究をさらに発展させ、生体医療関係への応用や、現在の技術をシリコン以外の材料に適用するなどの仕事を中心に研究していきたいと思っています。どうかよろしくお願い致します。

●叙位・叙勲 平成元年11月15日 ●死亡叙位(正六位)

叙勲 勲五等瑞宝章
杉浦勝正 元総務課長

California大学 Berkeley校にて

第5部 助教授 大井謙一



“Are you going to Scarborough Fair……”
1967年の映画「卒業」の舞台となったCalifornia大学Berkeley校のキャンパスでは、時折このメロディの鐘の音が流れてくる。1988年の9月から1年間、同校土木学科の構造工学・力学・材料グループにVisiting Scholarとして滞在する機会を得た。

私の専門は、鉄でできた建物の耐震設計である。帰国後まもなく(オシイとところであった)「サンフランシスコ大地震(正式にはLoma Prieta地震)」が発生したが、この周辺は地震の多いところで、耐震構造の研究は古くから盛んである。今回の滞在目的は、日本と米国で使われている耐震構造実験法や耐震設計規準について比較研究をしようというものであった。私のホスト教授のSteve Mahin先生は、主任教授になって多忙だったにもかかわらず、研究に関する議論はもちろん、私の講演会のリハーサルや報告書の英文添削に至るまで、自ら面倒をみてくれた。本当に有り難いことだと思っている。

Berkeley校は、工学系全体の大学院教育のレーティングが最近全米第1位になったとかで、頭の良さそうな大学院生や留学生が各地から集まっている。私も後学のため、大学院の講義をいくつか聴講させてもらった。ただし、「おれは宿題はやらないよ」と



最初にことわったうえで。

Berkeley校は、学生運動やヒッピーの発祥の地としても知られ、国際的で自由でinformalな一種独特の雰囲気にも包まれている。私たち親子3人の一家は、Berkeleyから2つ北のEl Cerritoという閑静な街にアパートを借り平穏な一年を過ごすことができた。写真はハロウィンの夜の訪問者“Trick or Treat”(50人ぐらいは来たと思う)のナップ。

武者修業のつもりで出かけたこの1年、いろいろと苦勞もあったが、今では楽しい思い出となった。それについても留守中、完ぺきなバックアップ体制をしてくれた研究室の皆さん、諸先生方、どうもありがとうございました。“I left my heart in San Francisco…… and Berkeley.”

編集後記

「IIS TODAY」について

衆院選の時期だったせいか、創刊号の表紙に思わずうなるとか絶句したとかの声が所内外から聞こえてきます。創刊号には特別に岡田所長のご出馬を仰いで発刊のごあいさつをいただきました。本号より、雰囲気はそのままですがタイトルを「IIS TODAY」として、生研の活動を支える方を第一面に順次取り上げていく予定です。武田節に「人は石垣、人は城」とあるごとく、研究組織にとってはメンバーひとりひとりの発想や研究哲学が核となるだろうし、またこの「生研ニュース」を人と人とのふれあいを促進する媒体に育ててゆく上でも、構成員のクローズアップには大いに意義があるだろう——若干の議論のすえ私たちはこう結論して、表紙のスタイルを決めました。なお人選にあたっては、各部均等主義・年功序列主義を断固として退け、男女・国籍いささかも問うことなく、編集室の確固たる独断と偏見を貫く所存です。自薦でも他薦でも結構ですから、ご提案がございましたら室員までご一報ください。(編集室長 渡辺 正)

本第2号の発行をもちまして、当生研ニュースは名実ともに「定期刊物」の仲間入りを果たすこととなりました。その体裁の斬新さ故か、第1号についてはさまざまな反響がよせられておりますが、おおむね好意的なものが多いようでほっとしています。お忙しい中原稿を快くお引き受け下さったかたがたに深く感謝致しますとともに、今後とも読者の皆様へ清新な話題をお届けすべく編集室員一同努力して参りますので、御声援のほどをよろしくお願い申し上げます。(編集室 柳本記)